

呉

呉というのは、近頃、なにかと脚光を浴びている街だと思う。「この世界の片隅に」という映画もヒットしたし、「艦これ」というブラウザゲームも一時期流行った。呉という街に関しては、大まかではあるものの、なんとなくのイメージだけは持っていた。



呉に実際着いてみると、結構こじんまりとしているというか、普通によくある地方の街といった印象を受けた。海の方に向かって歩いていくと、自衛隊の資料館や大和ミュージアムなど、ぽつぽつと「軍港っぽさ」が見えてきた。普段「艦これ」をやっていそうな男性もチラホラいた。

呉市で1番定番と言える観光施設は、おそらく大和ミュージアムではないだろうか。明治以降の造船の街あるいは軍港の街としての呉の歴史等を展示する事を目的に、日露戦争、日本海海戦から100年目、太平洋戦争終戦から60年目にあたる2005年に開館された施設である。また広島市に近いこともあり、原爆ドームと併せて、修学旅行生達もよく訪れているみたいである。呉を全国的に有名な観光地に押し上げた立役者のように言われることもある様である。もともとは1980年代に、広島県が呉に県立の博物館を建てようと検討しはじめたことが発端。1990年に呉市から業務委託を受けた財団法人日本博物館協会が博物館



基本構想を策定し、「造船技術の進展」を展示する博物館が提唱された。1994年頃、戦艦大和を博物館の核としていく事に構想が固まるものの、広島県側が呉市に、軍事色の強い博物館を県立で開館することに難色を示す。そこで呉の市議会は、博物館建設を市主体で取り組



んでいく事を正式に表明。財源に関しては国と県への働きかけに加え、募金委員会を設立し、民間資金の活用も行われた。結果的に事業費の総額65億円のうち、国、県、地方交付税、募金等が約36億円、市負担が約29億円になっ

た。開館した2005年には来館者が1,229,250人という地方都市の博物館では類を見ないほどの盛況ぶりであったみたいである。軍事色が強い施設であるがゆえに、一部の団体や組織から、戦争を美化しているといった批判も起き、中国や韓国などにもこれが飛び火した。まあ、今のご時世、もはや仕方のない事だろう。大和ミュージアムの盛況に伴い、呉が広島湾一帯の観光ツアーに組み込まれるようになる。たしかに、この地帯には、原爆ドームのある広島市、宮島のある廿日市市、またちょっと足を延ばせば、錦帯橋のある岩国市など観光地は目白押しである。

戦艦大和だが、名前に関しては誰もが知っていると思うが、実際にはどういった戦艦であったかという事に関しては、案外多くの人が知らないのではないだろうか。実は私もそうである。なんとなく「最強の戦艦」というイメージを持っているだけで、実際はよく知らない。戦艦大和とはいったいどういう戦艦なのか。大和は当時の日本の最高技術を結集し、建造された戦艦である。その存在自体が最高軍事機密であったうえ、開戦前には完成していなかったといわれている。太平洋戦争が開戦してすぐに就役、1942年6月のミッドウェー作戦が初出撃となる。1943年末、輸送作戦中に米潜水艦の雷撃で小破するも、修理後1944年には^{こんさくせん}渾作戦、マリアナ沖海戦に参加。同年10月、^{しょういちごうさくせん}捷一号作戦でアメリカ軍護衛空母部隊に対し46cm主砲砲撃を実施した。1945年天一号作戦において、沖縄方面へ出撃するも、目的地に到達する前にアメリカ軍の機動部隊の





猛攻撃を受け、坊ノ岬沖にて撃沈。戦場で活躍したという話がほとんどないために、知名度とは裏腹にあまり評価されていないという説もあるらしい。また航空機が主流となりつつあった時代に建造された、時代遅れの産物みたいに一部では言われているみたいである。実際どうなのかは別として、非常

に興味深い意見だと思う。このように色々と調べていくと、思いもしなかった事実や評価が存在していて、浅はかな知識だけでわかった気になっているようでは駄目だなどつくづく痛感する。

呉で食事をしたお客様からのご紹介で、翌日は江田島にある旧海軍兵学校を見学する事になった。呉市内から、車で1時間ぐらいだろうか、旧海軍兵学校跡地に到着。現在は海上自衛隊の幹部自衛官や海曹士自衛官の教育の場となっている。

海上自衛隊には第1から第4まで、4つの術科学校があり、各々の専門術科の教育を行っている。ここは第1術科であるので、砲術、水雷、掃海、航海、通信制、主として艦艇術科に必要な教育を行っている。戦前、江田島といえば海軍兵学校を指したと言われているぐらいの存在であったとのこと。海軍兵学校というのは、大日本帝国海軍の将校たる士官の養成を目的とした教育機関の事である。1876年から1945年の第二次世界大戦終戦まで存続していた。1869年、東京の築地に前身の海軍操練所が開設され、1870年、海軍兵学寮と改称し、1876年に三度改称されて海軍兵学校の開校となる。この築地時代に明治天皇が皇居から海軍兵学校まで行幸したみちがあり、ここが今ではみゆき通りと呼ばれている。みゆき通りという語源だが、天皇(御)が行幸(幸)に際して通行したという事から、この名前が付けられている。1888年、呉市の呉鎮守府に近接した広島県安芸郡江田島町に移転されることとなった。話によると、この海軍兵学校というのはすべり止めが東大や京大と言われたほどの超エリート校であったとの事。この海軍兵学校に入学するための予備校みたいな学校が全国に存在していたぐらいで





ある。まず身体検査、運動機能検査が行われ、そこから学術試験の受験者が決定され、また学術試験に関しては5日間連続で行われ、数学、英語、歴史、物理、化学、国語、地理と科目もビッチリある。学術試験の採点結果は当日に発表され、定められた合格点に達した者のみが次の学術試験を受けられるとい

う、いわばふるい落としのやり方であった。まだその後に面接試験があり、最終的な合格者が発表される。志願者の増加に伴い、事前に内申書による事前選考も行われるようになっていったみたいである。入学できたのは、頭も良くて、運動もできる、超優秀な人ばかりであったに違いない。海軍兵学校といっても、似たようなものに海軍機関学校や海軍経理学校というものもある。海軍機関学校というのは、日本海軍の機関科に属する士官を養成するために、設置された学校のこと。もう一方の海軍経理学校というのは、庶務、会計、被服、糧食を受け持つ主計科要員育成のための学校であった。これらを併せて、旧海軍三校という呼び方がされる。

私達が江田島の旧海軍兵学校に着くとまず、名簿に名前を記入する。ツアーの開始時刻まで、待合室のような場所で待機する。待合室のすぐ近くには自衛隊グッズが販売されていた。大和ミュージアムなどにも売店はあるのだが、なかなか珍しかったのか、せまい売場にたくさんの観光客が押し掛けていた。時間が来て、いざツアーが始





大講堂

まる。私達は、呉に来てから、この場所の事を知ったのだが、現地にはたくさんの見学者達がいた。みな、どこでこの事を知ったのだろうか？ガイドの指示に従い、集団で敷地内を回っていく。まずは大講堂。とても広い。1917年に、兵学校生徒の入校式、卒業式の間として建築された。外壁には、瀬戸内海産の花崗

岩が使われており、約 2000 人の収容が可能であるとの事。前方が舞台みたいになっていて、日章旗と旭日旗が中央に飾られている。非常にかっこいい。儀式などが行われる際は、ここで行われる様である。その次に見学したのが、幹部候補生学校庁舎。ここはあいにく外からしか見学できないが、著名な建築家が手掛けた西洋的な煉瓦造りの建物で、非常にカッコいい。そして最後が教育参考館。ここに関しては、写真も携帯電話も使用厳禁。帽子も取って見学するのが決まり。決まりというより、マナーといった方が良いのかもしれない。ここは決して観光地ではなく、学ばせて頂く場なのである。戦没者たちの慰霊の場でもある。戦没者たちが、家族に向けて書いた遺書も展示されているのだから、気を引き締めて見学しなければならない。館内は広く、貴重な資料がたくさん展示されている。不思議とこのような場所を訪れると、私は今の時代を生きる一人の人間として、なんだか責任感や使命感のようなものを感じるのである。今みたいな時代だからこそ、この場所で学ぶという事は大きな意味があるのかもしれない。

呉という地名を聞いて、興味深いと思う人もいれば、行く気持ちになれないような人ももしかしたらいるかもしれない。私個人の意見だが、別に訪れて見学する分には、何の問題もないわけで、むしろ、今の時代、訪れてみて、何かを考えるきっかけにでもなれば素晴らしい事ではないだろうか。それにしても、すこし足をのばせば原爆ドームや広島城も見学できる。宮島だってそんなに遠いことない。山陽は、見るところがたくさんあって本当に良いと思う。その中でも特に呉に関しては、小さい街でありながらも色々と勉強になる事があった。今後は、修学旅行生の校外学習などにも積極的に取り上げられることが多くなってく



大講堂 外観



幹部候補生学校庁舎

るのではないだろうか。非常に良いことだと思う。軍港の街を覗いてみるというのは、面白いだけでなく、色々と勉強にもなるし、非常に有意義な事ではないだろうか。

ウェバー伊安